

いつだって『人間』であるために

弘前大学教育学部附属中学校

小島 に こ

最後、その虎が白い月へ吠えたとき、私の目からは涙が出てきた。なぜ涙があふれたかはわからなかったが、この話が、私に大きな事を訴えかけているのを感じた。

一つ、この話の中で、私の胸に爪跡を残した言葉がある。

「臆病な自尊心」というものだ。

「もちろん、かつて郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。」李徴はそう語っている。臆病、という弱さから、自尊、という強さが生まれるのだろうか。

初めはわからなかった。しかし、二度目に読むうちにやっとわかってきた。昔から才能があるもてはやされていた李徴は、詩で名を為そうとした。しかし、師についていた、いわゆるライバルと切磋琢磨（せつさくま）しあったりなど、自分を高めるような行動には出なかった。恥ずかしいからだ。自分を高めるには自分の短所を直さなければいけない。つまり、自分の非をさらけ出し、認めなければいけないのだ。若くから俊才といわ

れてきた李徴にとつて、それは何よりの屈辱であつただろう。李徴は、その「尊大な羞恥心」で、自分を高める道を閉ざした。

羞恥心が侵食した、穴ぼこだらけの実力。この穴を埋めたのが、「臆病な自尊心」だ。自分の才能の底なんて見たくない。底なんてない。そんな臆病な気持ちから肥大した空虚な才能は、本当に持っていたものさえも潰（つぶ）していっただろう。

「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」。この二つの感情、この二つの猛獣に、李徴は飲みこまれてしまった。虎は、その模様が文字の羅列に見えることから、「文字の獣」といわれているそう。言葉や文字を操る詩人を目指した彼は、逆に文字に縛（まと）われた獣になってしまった。彼の文字への執着（しゆくわく）が転じた結果、文字に捕らえられてしまったのだ。部分的に李徴の夢が叶ってしまったのが恐ろしいところだ。

素直に努力をすればよかったのだ。穴のない才能を、生まれるがらに、努力もなしに持っている人なんていないのに、

と私は思った。しかし、妙に背筋が伸びるような感覚がした。私だってそうなのだ。

勉強や美術部での活動。数字や言葉の評価ではつきり優秀をつけられてしまうのが、私には痛くて仕方がない。もちろん、特別悪くないのだったってわかっている。下には下がいる。それでも、同じように上には上がいる。自分の足りない部分が見えてしまう。私だって、もうちょっと勉強していれば、練習していれば、追いつけたんだもの。そんな風に逃げてしまうことが、少なからずある。それでは駄目なのだ。そこから言い訳して目を逸らしてしまえば、私は虎になってしまう。その劣等の穴ぼこに落ちてしまわないよう、埋めていかなければいけない。そして、その穴を埋めるのは、いつだって努力でなければいけないのだ。

獣は、自分の感情一つで動いてしまう。その感情、つまり猛獣の心を、おさえられるのは人間だけだ。感情を噛みくだいて、次に目を向けられるのは人間の証。そして、辛い胸の内を言葉にして打ち明けられる、「友」という存在を持つ

も人間だけだ。李徴が哀惨と出会って人間を取り戻したのはきつとそういうことなのだろう。

そのメッセージが、私の心に伝わってきた。

題名を聞いたことがあるし、面白いらしい。そんな軽い気持ちでこの作品を選んだが、これからの私に、とても大切なことを教えてくれた。

中学三年生。進路について本格的に考えた今、そのもつと先を見すえながら目の前のことをこなさなければいけない。すると、今の自分と夢や理想との差を突きつけられることもあるし、きつとこれからもそのようなことがずっと続いていくのだろう。正直わたしは今、周りの人たちや理想との差に慌あわてて戸惑あわってる最中だ。それでも、自分の非を受け止め、噛みくだいて、前を向いて、逃げずに進んでいくべきなのだ。認めたくない、見たくない、進みたくない、頑張れない。そんな心の猛獣たちをつなぎとめるものを、いつでも持つていようと思った。それが私が、人間でいる意味だ。